慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大学生の学習実態に基づく大学図書館の役割
Sub Title	Roles of university libraries based on actual learning styles of university students
Author	古橋, 英枝(Furuhashi, Hanae)
Publisher	三田図書館・情報学会
Publication year	2014
Jtitle	Library and information science No.72 (2014.) ,p.95- 121
JaLC DOI	
Abstract	【目的】本研究は, 大学生の学習場所・時間・形態に関する実態調査を行っている。調査結果に基づいて, 大学図書館においてより学習実態に即したサービス展開を可能にする方向性を提案することと, その中での大学図書館の役割について考察することを目指した。 【方法】東京外国語大学の全学生を対象に, 学生が学習場所の選択時に優先する空間・設備の各要素と学習形態・学習時間数を質問紙調査により調べた。さらに, 学生29名を対象に3日間の生活時間調査を実施し, 同学生に対するフォーカスグループインタビューで学習に関わるより詳細なデータを収集した。 【結果】回答した全学部学生のうち 1) 62.3%が最も利用時間が多い学習場所が「自宅」であり, 2) 42.3%が空間要素として「集中できる」ことを最も重視していたが, 「自宅」では「集中できない」と回答した学生が28.2%いた。一方, 「大学図書館」では「集中できる」という回答者が94.6%いたが, 学内学習の阻害要因としては, 学食の営業時間の短さや休憩スペースの不足など, 学習を継続させるための周辺要素が十分でないことが挙げられる。また, 持ち込み資料のみを使用した学習スタイルの学生が一定数いるため, 館外へ学習場所を分散させることで, 各学習場所のスペース確保だけでなく, 新たな空間の創出にもつなげられることが明らかになった。 Purpose : This paper investigates the study conditions of university students, focusing on places, hours and study habits, in order to consider how university libraries should provide services to match students' learning style. Method : All students of Tokyo University of Foreign Studies were surveyed to clarify the following three points : 1) spatial and equipment aspects that students put priority on when studying, 2) their actual learning styles, and 3) number of hours of studying. Also, the lifestyles of 29 students were directly observed for three days, and then a focus group discussion with the students was conducted for deeper analysis. Results : Of all the undergraduate respondents who participated in the survey, 62.3% spent most of their study time "at home", while 28.2% "could not concentrate" when studying "at home". Furthermore, at least 42.3% of the respondents regarded that being able to concentrate on studying was a crucial element of the learning space. In contrast, 94.6% of the respondents "can concentrate" on studying at "the university library". This study revealed hindrances to studying such as shortness of opening hours of school cafeterias and insufficient spaces for rest and refreshment. It was also found that decentralizing study space out of the university library would not only provide enough learning space for students, especially those who use only their own materials, but also create additional space for students.
Notes	原著論文
Genre	Journal Article

URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00003152-00000072-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Library and Information Science. 2014, no. 72, p. 95–121.

原著論文

大学生の学習実態に基づく大学図書館の役割

Roles of University Libraries Based on Actual Learning Styles of University Students

古　橋　英　枝
Hanae FURUHASHI

Résumé

Purpose: This paper investigates the study conditions of university students, focusing on places, hours and study habits, in order to consider how university libraries should provide services to match students' learning style.

Method: All students of Tokyo University of Foreign Studies were surveyed to clarify the following three points: 1) spatial and equipment aspects that students put priority on when studying, 2) their actual learning styles, and 3) number of hours of studying. Also, the lifestyles of 29 students were directly observed for three days, and then a focus group discussion with the students was conducted for deeper analysis.

Results: Of all the undergraduate respondents who participated in the survey, 62.3% spent most of their study time "at home", while 28.2% "could not concentrate" when studying "at home". Furthermore, at least 42.3% of the respondents regarded that being able to concentrate on studying was a crucial element of the learning space. In contrast, 94.6% of the respondents "can concentrate" on studying at "the university library". This study revealed hindrances to studying such as shortness of opening hours of school cafeterias and insufficient spaces for rest and refreshment. It was also found that decentralizing study space out of the university library would not only provide enough learning space for students, especially those who use only their own materials, but also create additional space for students.

I. 大学生の学習調査をめぐる研究動向
- **A.** 大学における自己点検・評価の導入と学生調査
- **B.** 大学図書館における学生調査
- **C.** 研究の目的

古橋英枝：国立情報学研究所，101–8430 東京都千代田区一ツ橋 2–1–2
Furuhashi HANAE: National Institute of Infomatics, 2–1–2 Hitotusbashi, Chiyoda-ku, Tokyo 101–8430, Japan
e-mail: ohana@nii.ac.jp
受付日：2013 年 12 月 8 日　改訂稿受付日：2014 年 5 月 14 日　受理日：2014 年 12 月 2 日

II. 東京外国語大学学生に対する学習実態調査の対象と方法
A. 東京外国語大学学生の学習場所と環境
B. 調査対象と方法
III. 東京外国語大学学生に対する学習実態調査の結果
A. 学習場所に対する空間的・設備的要素の選好と実態
B. 学習時間帯と時間数
C. 学習スタイル
IV. 大学生の学習における大学図書館の役割
A. 学習場所としての大学図書館の役割
B. 情報源としての大学図書館の役割

I. 大学生の学習調査をめぐる研究動向

A. 大学における自己点検・評価の導入と学生調査

日本の大学は今,「18歳人口の減少」と「大学設置基準の大綱化および自己点検・評価の導入」という二つの大きな要因を軸に，外圧的に教育改革を進めなければならない状況にある[1)]。梶田叡一は現在のいわゆる大学全入化時代を「新・新制大学」の時代と名付け，大学の目的が旧制大学時代のエリート養成でも新制大学時代のリーダー養成でもない，“普通の若者に対する一般的な社会人養成の教育”[2)]に移行したと述べている。つまり，大学に進学してくるのは従来のように目的を持った熱心な学生ではなく，必ずしも大学そのものに興味・関心を示しているわけではない学生が大多数を占めることになったのである。

さらに1991年，文部省が定める大学設置基準の規定が大幅に撤廃され,「設置基準の大綱化」と言われる出来事が起きた。大綱化と同時に努力義務として導入された自己点検・評価は，1999年には実施と結果の公表が義務化され，2004年には改正学校教育法によって法による規定となった。

大学教育の在り方について探求する動きが本格化したのは1970年代からであるが，大綱化を受けて1990年代に急速に進んだのは言うまでもない。この時点での大学改革はあくまでも「教育」の改革であり「学習」の改革ではなかったが[3)]，同時期に教育と学習との密接な結びつきについて言及している研究もいくつか見られる。苅谷剛彦は，大学の教育改革は「学習改革」と密接な関係があると述べており[4)]，溝上慎一も苅谷を引用する形でその評価方法についても言及している[5)]。

2008年に文部科学省中央教育審議会が発表した「学士課程教育の構築に向けて（答申）」の背景として，大学改革の第1段階にあたる教育改革の形式化・空洞化があることは否定できない[3),6)]。大学は教育の質保証を求められるようになり，教育から学習へのパラダイム・シフト，すなわち教育内容よりも学習成果（ラーニング・アウトカム）を適切に測定・評価することに重点を移したのである[7),8)]。

学習成果の測定・評価が重視されるようになった日本の大学において，近年多数の論考がその必要性について言及しているのがInstitutional Research（以下，IR）であり[9),10),11),12)]，高等教育分野の雑誌である『IDE』や『大学評価研究』などでも特集が組まれ，注目されている[13),14)]。IRの定義については様々な議論があるが，現在ではJoe L. Saupeによる“IRとは機関の計画立案，政策形成，意思決定を支援するための情報を提供する目的で，高等教育機関の内部で行われる研究”という定義が一般的に利用されている[15)]。つまり，機関内において経営に必要なデータの策定，収集から分析，提供を扱った研究領域を指す。

山田礼子はIRと学習成果（ラーニング・アウトカム）を結び付け，教育改革の導入段階から教育環境の整備段階へと移行している現在の大学では，その促進のためにIRが必要であると述

べている[16]。山田らは具体的な方法として，米国のUCLA高等教育研究所（Higher Education Research Institute）の大学生調査（College Student Survey）の日本版を開発し，JCSS（日本版大学生調査）やJFS（日本版新入生調査）を2005年以降実施している[17]。調査結果からは，学習成果と大学の授業の関連性や[18]，大学における経験による学生類型の検証[18]，大学入学前の学習経験と大学での学習の適応との関連性など[19]，複数の成果が得られている。

山田らの調査以外にも，大規模調査として東京大学の大学経営・政策研究センターが実施した「全国大学生調査」や[20]，Benesse教育研究開発センターが実施した「大学生の学習・生活実態調査」が存在する[21]。授業参加に対する積極性や，学習成果に対する主観的な判断が主たる調査項目として設定され，物理的な学習行動よりも教育心理学としての学習行動に焦点が当てられている。これは，これらの調査が“大学での学習における学習意欲，動機づけ，学習態度や習慣などの情緒的な要因を向上させることにつながる教育評価の開発をおこなうことに主眼”[22]を置いていることに起因する。つまり，学習実態という名称ではあるが，調査項目は学習の5W1H，すなわち「いつ」，「どこで」，「誰と」，「何を」，「なぜ」，「どのように」ではないのである。

大規模調査以外にも，個々の大学内の調査として全学生を対象とした学生生活実態調査が数多く実施されている。かつては困窮度調査であったが[23]，現在は学生生活の意識と実態を正確に把握し，よりよい教育・研究環境作りのためのデータ提供を目的としている大学が多数を占めている[24]。

B.　大学図書館における学生調査

1991年の大綱化および自己点検・評価の努力義務化によって大学に評価が導入され，その附属機関である大学図書館も同様に評価の対象となった。しかし松井博によれば，43大学の自己点検・評価の報告書を概観したところ，図書館に関する記述がないものや，あっても形式的な報告に終っている場合が少なくなかったようである[25]。また，大学本体とは別に図書館として単独で実施した点検・評価においても具体的な手法が確立していなかったため，各大学図書館は国立大学図書館協議会や私立大学図書館協会といった関連協会から発表されたガイドラインを手法の参考にしていた。つまり，評価の導入段階では多くの大学が“図書館の機能の違いを表現できず，規模の違いがそのまま外形的な数値に表れ”ており，“単なる統計数値の比較に終っている”[26]のが現状であった。

図書館サービスの評価基準が「図書館視点」から「顧客視点」へと変化したきっかけは，永田治樹や佐藤義則らによる，マーケティングの研究・実務において中心的な位置を占めているSERVQUALの紹介であろう[27,28]。SERVQUALとは，各サービスに対して，7段階のリッカート尺度で「期待」と現状に対する「認知」のレベルを尋ね，その差（GAP）を測定し，評価する方法である。このSERVQUALが大学図書館のサービスの品質を捉え切れなかったため[29]，米国の北米研究図書館協会（ARL）がテキサスA&M大学のチームと大学図書館向けに共同開発した品質調査ツールがLibQUAL＋である[30]。LibQUAL＋を実際に利用したサービス評価は大阪大学，金沢大学でも実施されているが[31]，慶應義塾大学での事例報告が詳しく[32]，理工学メディアセンターではフォーカスグループインタビュー（以下，FGI）も加えて館内の学習エリアを新規に設置した[33]。この他にも，同様に「顧客視点」に重点を置いた調査研究がある。1996年に米国の大学・研究図書館協会（ACRL）に設置された学術図書館のアウトカム・アセスメントに関する委員会は，“測定は，機関中心ではなく顧客中心におこなわれなければならない”と述べており，“図書館のアウトカムの本質を「利用者における変化」と規定した”[34]。戸田あきららの研究はこの視点に立って大学図書館と大学生の学習成果との関連の把握を目指したものである[35]。

C. 研究の目的

ここまで大学生に対して実施されている学習調査について，高等教育研究および大学図書館研究の両方向から述べてきた。大学が実施する大規模学生調査は，普遍性を担保するデータの安定性と方法の信頼性に不安があり，大学内でのより詳細な調査・分析を実施することで，はじめて“高等教育全体もしくは個々の高等教育機関の教育改善の土台にもなる”[16]。また，大学内の調査についても，“全学レベルの学生実態調査に目がいきがちであるが，授業や学科，学部などのサブユニット規模のアウトカムの結果もIRにつながるデータとして重要”[36]であることが指摘されている。しかし本章A節で述べた通り，個々の大学内の調査では学習に関する内容よりも生活時間の割り振りや生活費等，生活実態全般に対してより具体性を持った設問が用意されており，学習に関しては授業時間についての言及に留まっている。谷村英洋はこれらの現状に対して，学習成果をめぐる議論が盛んな一方で，“実体としてある学生の学習のありようを，多角的に掘り下げて検討するという現状認識の作業は未だ尽くされていない”[37]と指摘している。

一方で，大学図書館が実施してきた利用者調査は，三浦逸雄が指摘したように“図書館利用を利用者の情報ニーズや情報探索行動との関連で捉えようとするアプローチは極めて少な”く，“図書館に向けられた要求だけに眼を向けた調査が多い”[38]という課題をクリアしているとは言い難い。この指摘を受けて，中村和彦は南山大学学生を対象として調査を実施し，情報探索行動の一つとして図書館利用を把握することを試みており[39]，本研究の調査（後述）も同じ視点に立って実施している。大学本来の使命が“学生の学習行動や成長に対する大学の介在可能性”の探究であるならば[40]，その一組織である図書館の使命もまた同様であると言える。しかし，長谷川哲也らの指摘にもあるように，両研究は「学習」というキーワードにおいて研究対象が重なり合っているにもかかわらず分断されており，“大学図書館の研究を自己完結的なものへと押しやってきた”[41]と言える。

以上のことから，本研究では，大学生の学習実態調査を一大学において全学的に実施し，その結果に基づいて今後の学習サービスの方向性を提案すると共に，大学図書館の学習における役割を考察する。非営利組織において“自らのサービスを本質的に価値の高いものとみなし，サービスが利用されないときには顧客の無知と意欲のなさを非難し，顧客についての調査をあまり考慮しようと”しないのであれば，その組織は“顧客中心というよりも近視眼的で組織中心である”[42]。しかし仮に顧客中心だとしても，その顧客が図書館利用者に限定されているのであれば，それは背景的に図書館という組織中心であると言わざるを得ない。また，対象が非来館者にまで及んだとしても，図書館利用についてのみ言及するのであれば同様である。真に顧客中心であれば場所を限定することなく，一つの行動におけるすべての実態と要求を調査すべきである。

II. 東京外国語大学学生に対する学習実態調査の対象と方法

A. 東京外国語大学学生の学習場所と環境

東京外国語大学は，調査時の2011年時点においては，学部については26の専攻語から編成される外国語学部のみ，大学院については2009年度に改編された総合国際学研究院のみで構成されている。学部の一学年の学生数は約800名で，大学院学生も併せると大学全体で4,340名が在籍している（2011年5月1日現在）。

学部教育は，受験時に選択した26言語のうちの1言語について1～2年次に専攻語を集中学習し，3～4年次に人文・社会科学系の学問分野や方法論に対応した3つの履修コース（言語・情報コース／総合文化コース／地域・国際コース）の中から1つを選択して，学習を進める仕組みになっている。例えば，ドイツ語専攻の学生の場合，専攻語の単位数について1～2年次に24単位取得することが定められているのに対して，3～4年次では4単位のみを取得することが定められている。専攻する言語によって異なるが，

1～2年次の取得単位数によっては3年生への進級が認められない場合もあるため，必然的に1～2年次が最も履修単位数が多くなる。

学生の学習場所は大きく分けて大学内・大学外の2種類存在するが，まず大学内の学習場所と環境について概説する。大学内にある合計9つの建物の内，附属図書館，大学会館（いわゆる学食），研究講義棟，アゴラ・グローバルの4ヶ所が主たる学習場所となっている（第1表）。

附属図書館は4階建の建造物で，座席数は閲覧席395席，デスクトップPC席158席の計553席があり，学習目的の空間としては4つの建物中最大である。オープンスペースの座席以外にブース型の個人閲覧室3室とガラス張りのグループ閲覧室を5室用意しているが，入館ゲートの外側に設置されている一部の空間での飲み物摂取を除き，個別の閲覧室内も含め建物内すべて飲食を禁じている。また，グループ閲覧室以外の空間では周囲の学習者に迷惑になる程度の音量での会話を許可していない。館内各所に無線LANが設置されており，一部のエリアを除きネットワークに接続可能である。

大学会館は2階建の建造物で，大学周辺に食事がとれる店舗が多くない環境下で多くの学生が食事に利用する建物である。しかし，当然座席の利用目的は食事であり，学習に利用していても離席を促されることはないが，優先されることもない。とはいえ，常時飲食可能であると同時に，通常の音量での会話が可能な空間である。建物内全般に無線LANが設置されているため，ノートPCの利用も可能である。

研究講義棟は8階建の建造物で，1～4階が教室エリア，5～8階が研究室エリアとなっているため，共同研究室などを利用しない学生は主に1～4階を使用する。授業期間中も期間外も空き教室を学習場所として公的に提供しているわけではないため，主たる学習空間は1～4階のオープンスペースに設置された机と椅子ですべてである。これ以外にAV資料が利用可能なAVライブラリが一室用意されており，PCとプリンタが設置され，学習に利用されている。1～4階は全フロアで無線LANが利用可能である。さらに，大学院生向けには研究講義棟4階に学習室が別途設けられている。室内はデスクトップPCエリアと読書エリアに分かれているが，完全に空間が区切られた個人ブースは設けられていない。

アゴラ・グローバルは2階建の建造物で，空間の大部分はホールに充てられている。学生が利用可能な空間は1階エントランス脇のカフェが併設されたフリースペースで，飲食が可能なだけでなく通常の音量での会話も可能であり，無線LANも設置されている。また，祝日も土日と同様の時間帯が利用可能な点が他の学習場所とは大きく異なっている。

次に大学外の学習場所について述べる。個々人が利用する場所によって設備は多様だが，場所については2011年2月に附属図書館が実施したアンケートによって主たる箇所が明確になっている[43)]。学外の学習場所として最も多く選択されたのが自宅，次いで電車・バスの中，自由記述欄で飲食店，公共図書館が挙げられた。この調査結果を後述する質問紙作成時に参考にした。

第1表　学内学習場所の利用時間及び設備・利用方法

名称	利用時間（平日）	利用時間（土日）	PC	無線LAN	飲食	会話
附属図書館	9:00–21:45	9:00–17:00[1]	158台	有	原則不可	原則不可
大学会館	11:00–18:30[2]	閉店	なし	有	可	可
研究講義棟	8:00–20:00[3]	閉鎖[3]	34台[4]	有	可	可
アゴラ・グローバル	8:30–20:00	10:00–17:00	なし	有	可	可

[1] 通常は13:00–18:45だが，震災後一時的に開館時間を変更
[2] 1階は14:00まで
[3] 大学院生は入棟可能（大学院生用学習室は平日8:00–23:00，土日8:00–20:00，祝日は除く）
[4] AV資料閲覧のために用意されている部屋＝AVライブラリ（開室時間：9:30–17:30）

B. 調査対象と方法

調査は全部で3つ実施した。利用者調査すなわち学生調査の意義と方法については佐藤が述べており，統計的調査と質的調査の両方が補完的関係にあるため，“併用に基づく総合的な分析”が求められる[44]。このため，最初に学習実態の全体像把握のため，全学生を対象とした質問紙調査で学習環境の空間・設備に対する選好と利用頻度，学習形態および一週間の学習の合計時間を調査した。次に，日記式調査で生活時間における各行動の具体的な時間配分と学習時間・学習場所を調査した。最後に，FGIによって，理由や背景状況などの前述の2つの調査結果では明確にならない点を中心に尋ねると同時に，質問紙に提示できなかった潜在的な学習要素を調査した。なお，日記式調査とFGIの参加者には，学内の規定に則って謝礼を支払った。

1. 学習空間・設備・形態・情報源・時間についての質問紙調査

調査期間は2011年6月27日（月）から7月8日（金）までの12日間とし，東京外国語大学の全学生4,340人（学部学生3,800人，大学院生540人）を対象に調査を実施した。

質問紙については，調査紙とPC用・携帯電話用のウェブフォームの3種類を用意した。調査紙は研究講義棟・附属図書館・大学会館の3ヶ所で配布・回収し，ウェブフォームは，アドレスを記載したメールを全学生向け一斉メールで一回送信した。その他，調査の実施周知のため，研究講義棟内の教室以外の机および附属図書館内の机すべてに携帯電話用ウェブフォームのアドレスをQRコードにしたものを貼付した。また，学内に掲示したポスターにも同様にQRコードを掲載した。

843件の回答を得たが，全問未回答の2件を無効とし，最終的な有効回答数は841件であった。回収率は19.4%（n＝4,340人）であった。回答者の学年別の内訳を第2表に示す。

学部1年生の回収数が他の学年に比して多数となったが，学部学生の全回収数775件（92.2%）と大学院生の全回収数57件（6.8%），その他の学生の全回収数9件（1.1%）は概ね調査対象の全体数と同様の比率となった。

第2表　質問紙調査の学年別回答者数と比率

学年	回答数	比率
学部1年	320	38.0%
学部2年	198	23.5%
学部3年	169	20.1%
学部4年	88	10.5%
修士1年	25	3.0%
修士2年	14	1.7%
博士1年	8	1.0%
博士2年	2	0.2%
博士3年	8	1.0%
その他	9	1.1%
合計（人）	841	100.0%

調査項目は，大きく「学習場所」「学習環境」「学習時に参考にするもの」「生活・学習時間」の4つに分け，全部で14の設問を用意した（付録1）。前章でも述べた，「いつ」，「どこで」，「誰と」，「何を」，「なぜ」，「どのように」の6点に即した形式で設問を作成したが，「なぜ」と「どのように」については日記式調査およびFGIでの調査項目とした。質問紙作成の際には，従来の大学図書館の利用者調査の課題を解決するために，項目の設定や質問方式は従来と同様にしたものの[42),43),45)]，内容が大学図書館に限定されないよう十分に配慮した。

2. 生活時間についての日記式調査

本研究では，主に生活時間の全体像について日記式で調査を実施した。調査対象大学である東京外国語大学の前期試験期間中に調査期間が重ならないよう配慮し，2011年7月7日（木）から7月13日（水）までの7日間を実施期間とした。また，事前に参加者全員に対して期間中に日常と異なる特別なスケジュールがないことを確認し，調査の趣旨と記入時の注意事項を説明した。対象は，公募期間中に集った31名の中から2名を除いた，学部学生24名と大学院生5名の全29名となった。選択時には，本章A節でも述べたよう

に学年・専攻する言語によって学習の時間帯や内容が異なることを鑑みて，特定の学年や専攻語に偏らないよう配慮した。加えて，学習場所の選択要因および生活時間の使用方法の変化を確認するため，下宿生・自宅生それぞれが調査対象大学内の比率と同程度になるよう確保した。参加者の内訳を第3表に示す。

NHK放送文化研究所が実施している生活時間調査「国民生活時間調査」と総務省統計局が実施している「社会生活基本統計調査」の調査項目を参考に一日の行動分類を選定し[46),47)]，最終的に「1.　睡眠」,「2.　食事」,「3.　移動」,「4.　授業」,「5.　授業の予習・復習等」,「6.　卒論・修論・博論」,「7.　授業関連以外の学習」,「8.　アルバイト」,「9.　部活動」,「10.　その他の用事」,「11.　自由時間」の計11種類を設定した。本調査では，起きている時間のうち学習にどれだけの時間を費やしているのか，また，どの時間帯を使っているのかだけでなく，一日の中に学習に割ける時間がどれだけ存在するのかを併せて調査することを目的とした。

調査日は筆者が指定した平日1日・土曜日・日曜日の計3日間とし，土日は全員共通の2日間を指定したが，平日1日は学年ごとに5つの曜日が分散するように指定した。また，学習行動に該当する上記の行動分類の5～7については，時間帯の欄に線を引くと同時に学習場所を記入するよう併せて依頼した。調査終了者から順に7月11日（月）から15日（金）の間に直接持参して提出してもらい，回答漏れの確認と回答時に分類が困難だった行動についての調整を行った。

第3表　日記式調査の学年別・住居別参加者内訳

学年	下宿生	自宅生	合計（人）
学部1年	3	3	6
学部2年	3	2	5
学部3年	3	1	4
学部4年	6	3	9
合計（人）	15	9	24

学年	下宿生	自宅生	合計（人）
博士前期	2	0	2
博士後期	2	1	3
合計（人）	4	1	5

3.　潜在的学習要素に関するフォーカスグループインタビュー

FGI調査は，質問紙調査や日記式調査のような記録式の調査からは抽出できない，学習に関する潜在的な要素を調査することと，前述の2つの調査結果から筆者が疑問を持った点を中心に調査することを目的として実施した。前項で述べた日記式調査の参加者の内，日程の都合がつかなかった学部学生一名を除いた計28名に継続して参加を依頼した。学部学生と大学院生では学習スタイルと学習場所の選択肢が一部異なることから，学部学生23名で8名2グループと7名1グループの計3グループとし，大学院生は5名のみで1グループとした。グループごとの参加者内訳を第4表に示す。

調査日は2011年7月16日（土）と17日（日）の2日間とし，16日に学部学生2グループと大学院生1グループ，17日に学部学生1グループの調査を実施した。1グループにつき調査時間は約2時間として筆者が司会を務め，最初にインタビューガイドを準備して調査の概要を説明した。同時に，分析時には音声記録だけでは発言者の特定が困難であったり，例えば他の発言者に同意して頷く動作等，音声に残らない記録の捕捉も必要

第4表　FGIの学年別参加者内訳

学年	グループ			
	A	B	C	D
学部1年	2	2	2	0
学部2年	2	2	1	0
学部3年	1	1	2	0
学部4年	3	3	2	0
博士前期	0	0	0	2
博士後期	0	0	0	3
合計（人）	8	8	7	5

になるため，IC レコーダー以外にビデオカメラによる録画も同意のもとに実施した。

調査項目としては質問紙調査の集計結果より，「学習空間・学習場所」について 2 点，「学習設備」について 2 点，「相談相手」について 1 点，「学習人数」について 1 点，「学習時間」について 1 点の計 7 点を設定した（付録 2）。

III. 東京外国語大学学生に対する学習実態調査の結果

A. 学習場所に対する空間的・設備的要素の選好と実態

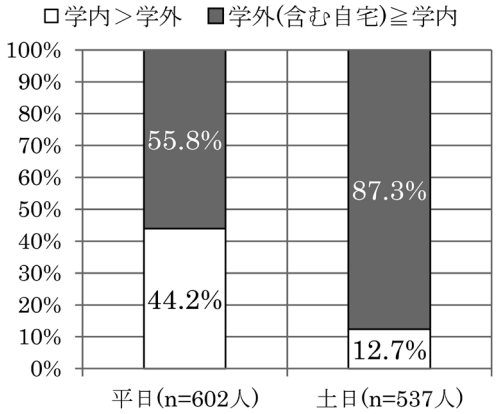
1. 学習場所の選択

質問紙調査の「あなたの学習場所について，利用時間が長い順にお答えください」という問いの結果，学部学生の利用時間が最も長い学習場所は①「自宅」62.3％（n＝769 人），②「大学図書館」20.0％，③「講義棟」9.9％であった（なお，「n＝」はこの項目の回答者総数を意味する。以下同様）。さらに詳細な実態を把握するために，場所別の具体的な時間数について質問紙調査と日記式調査それぞれの結果から計算した。

まず，質問紙調査の「あなたの 1 週間の生活時間について，学内と学外に分けてお答えください」という問いの結果から，「授業関連（含む卒論・修論・博論）の学習時間」について，平日（月～金）と土日に分けて学内での学習時間数と自宅を含む学外での学習時間数の差を計算した。なお，ここには授業時間は含まれない。その結果，平日は「学内より学外の学習時間が長い」学部学生が全体の 55.8％（n＝602 人）を占めており，土日も同様に「学内より学外の学習時間が長い」学部学生が 87.3％（n＝537 人）を占めた（第 1 図）。

次に，日記式調査に参加した学部学生 24 名全員の，授業時間を除く学習時間数を合計した（第 5 表）。平日は 62.4％（T＝92.5 時間），土曜日は 81.6％（T＝98 時間）が，自宅およびその他の学外での学習であった（ここで「T＝」はこの項目の合計時間数を意味する。以下同様）。

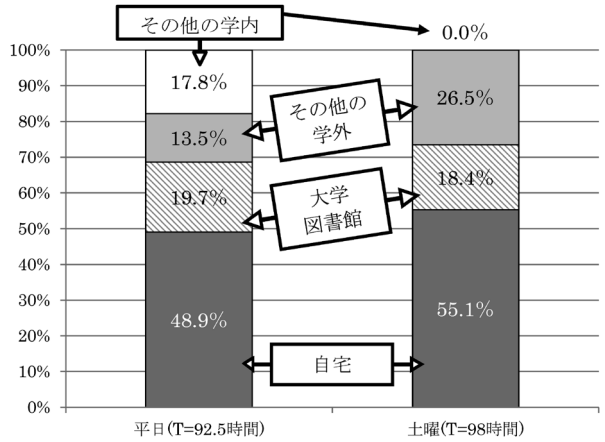
場所別の内訳を見ると，学習時間全体における「自宅」は平日の 48.9％から土曜日の 55.1％と大きな変化がなく，「大学図書館」も平日の 19.7％から土曜日の 18.4％とほぼ同程度であり，平日の「その他の学内」17.8％が土曜日では 0.0％になり，その分が「その他の学外」へと移動していることが分かる（第 2 図）。さらに学部学生 24 名の内，自宅生 9 名と下宿生 15 名に分けて比率を計算したところ，自宅生は平日における「大学図書館」29.3％（T＝41 時間）が土曜日では 19.4％（T＝43 時間）と少なくなっており，「その他の学内」も平日 18.9％から土曜日 0.0％へと減少し，その分「自宅」が増加していることが分かる（第 3 図）。一方，下宿生は平日よりも土曜日の方が「自宅」での学習比率が下がり，「その他の学内」も含め，減少分を「その他の学外」が吸収してい



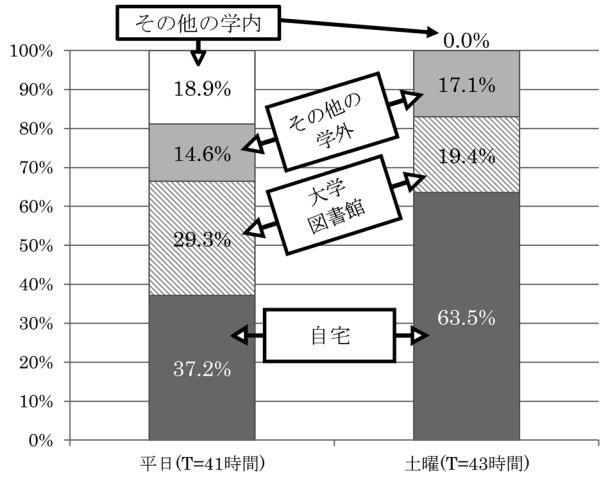
第 1 図　学内と自宅を含む学外との時間数の差（質問紙調査）：学部学生

第 5 表　曜日別・場所別にみた学習時間数と比率（日記式調査）：学部学生

学習場所	時間数（平日）	比率	時間数（土曜）	比率
自宅＋その他の学外	57.75	62.4％	80	81.6％
大学図書館＋その他の学内	34.75	37.6％	18	18.4％
合計（時間）	92.5	100.0％	98	100.0％



第２図　場所別にみた学習時間の比率（日記式調査）：学部学生



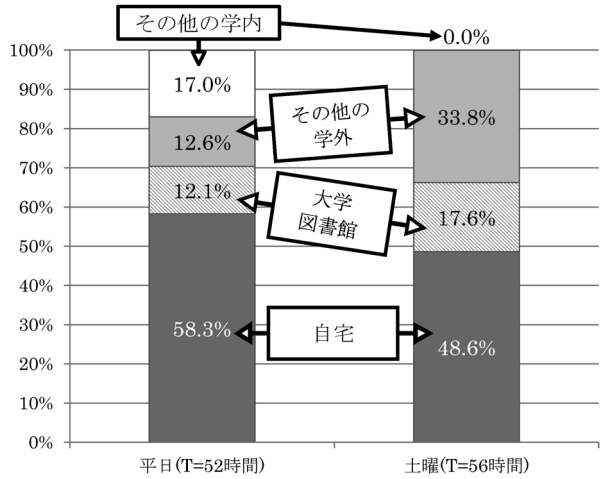
第３図　自宅生の場所別にみた学習時間の比率（日記式調査）：学部学生

た（第４図）。

2.　学習時に重視する空間的要素

質問紙において「あなたが学習時に重視する空間の優先順位を２位まで教えてください」と尋ねたところ，１位に選択された項目は①「集中できる」43.0％（n＝837 人），②「地理的に便利」16.8％，③「静か」14.1％であった（第６表）。2番目に重視する空間的要素でも「集中できる」は19.1％（n＝828 人）の回答者に選択されており，その重要性は明らかである。

そこで，FGI において「どのような条件が揃うと集中できますか。逆に，どのような場合，集中できませんか」と尋ねた結果，調査時期が夏期だったことにも起因するが，全体として「暑いと集中できない」や「頭を使うので静かにしてほしい」など，室温と騒音に対する意見については全員が共通していた。一方，「人がいないと怠けてしまう」，「大学 PC だと隣の人の目を気にして YouTube を見ないが，自宅では遊んでしまう」，「一人は淋しい」，「家はすぐベッドがあるから危険」といったような意見は自宅生にはなく，下宿生から多くあげられた。そこで，最も重視する空間要素に「集中できる」を選択した学生の内，最



第 4 図　下宿生の場所別にみた学習時間の比率（日記式調査）：学部学生

第 6 表　学習時に最も重視する空間的要素（質問紙調査）

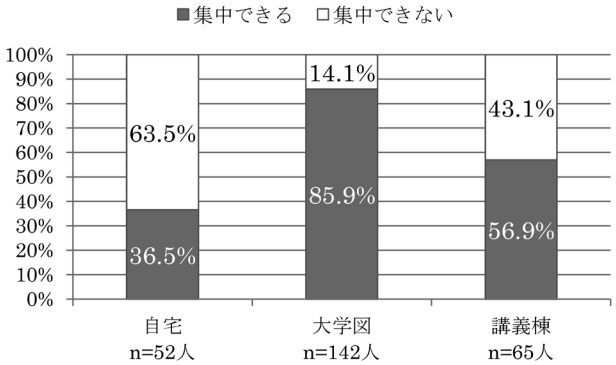
空間的要素	回答数	比率
集中できる	360	43.0%
地理的に便利	141	16.8%
静か	118	14.1%
適温	71	8.5%
十分なスペース	54	6.5%
飲食可	50	6.0%
きれい	32	3.8%
会話可	11	1.3%
合計（人）	837	100.0%

も学習時間が長い場所に「自宅」を選択した学生に対する「実際の環境を教えてください」という質問紙調査の回答を確認した。その結果，28.2%（n＝227 人）が「集中できない」と回答しており，重視している要素と実際の状況が一致していない学生が一定数存在することが分かった。同様に「集中できる」を選択した学生の内，最も学習時間が長い場所に「大学図書館」を選択した学生の場合には，94.6%（n＝74 人）が「集中できる」と回答した。

さらに，「2 番目に利用時間が長い学習場所」についても，「集中できる」ことを重視する学生が実際の学習場所を「集中できる」場所だと考えているかどうかの結果を確認した。学部学生の「あなたの学習場所について，利用時間が長い順にお答えください」に対する 2 番目に長い時間利用する場所の回答数は①「大学図書館」40.6%（n＝756 人），②「講義棟」22.9%，③「自宅」18.3%であった。

大学図書館を選択し，かつ「集中できる」ことを最重要視している学生の内 85.9%（n＝142 人）が実際に「集中できる」と回答しているのに対して，講義棟は 56.9%（n＝65 人），自宅は 36.5%（n＝52 人）となり，最も利用時間が長い場所と同様，大学図書館以外は「集中できない」学生が一定数存在するという結果になった（第 5 図）。実際，日記式調査参加者の内，学部学生の自宅生 9 名と下宿生 15 名の土日の学習時間数を場所別に合計したところ，自宅生の自宅での学習時間の割合が 63.5%（T＝42.5 時間）なのに対して，下宿生は 48.6%（T＝55.5 時間）であった（第 7 表）。一方，飲食店での学習時間の比率は下宿生の方が 25.2%と，自宅生の 5.3%よりも多いことが明らかになった。

以上から，空間的要素としては「集中できる」ことを重視しているが，場所が自宅の場合には必ずしもその条件を満たしているわけではないことも明らかになった。



第５図　２番目に利用時間が長い学習場所の実際の空間（集中できる）

第７表　住環境別にみた学習場所ごとの学習時間数（日記式調査）：土日

学習場所	自宅生		下宿生	
	時間数	比率	時間数	比率
自宅	27.0	63.5%	27.0	48.6%
大学図書館	8.3	19.4%	9.8	17.6%
飲食店	2.3	5.3%	14.0	25.2%
電車	0.5	1.2%	0.8	1.3%
地域図書館	4.5	10.6%	4.0	7.2%
合計（時間）	42.5	100.0%	55.5	100.0%

3.　学習時に利用頻度が高い設備的要素

次に，選択時の要素として設備的要素についての結果を確認した。質問紙における「あなたが学習時に利用する設備の利用頻度を３位まで教えてください」という問いに対して，①「PC」の77.4％（n＝819 人）は質問紙作成時の想定内であったが，②「イヤホン／ヘッドホン」の 16.6％はコピー機やプリンタを上回っており，想定外の結果となった。

FGI で「イヤホン／ヘッドホン」が多用される理由と利用方法について尋ねたところ，「語学学習のため」は十分に想定される回答であったが，「音楽を聞きながら勉強する」や「耳栓代わりに使う」といった意見も多く出た。音楽には「学習の開始時にモチベーションを上げる」などのプラス効果がある一方で，「YouTube で聞いていると，意識を持って行かれる」といったマイナス効果もあるようである。これらの学習設備の有無と学習場所の選択との間に関連性があるかどうかを質問したところ，「ないならないでなんとかなる」，「普段は関係ない」など，直接的な影響を与えているとは言い難い回答が返された。その理由は，本章Ｃ節で後述する調査対象大学学生の学習スタイルと密接な関係にある。

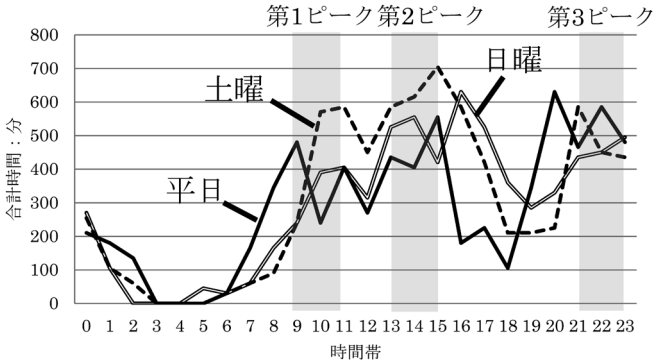
この他，FGI で学習を阻害する要素としては，「ロッカーが狭い」ために教材や辞書を置けずに学内での学習を断念するという周辺要素に対する指摘もあった。また，プリンタ・コピー機等，設備類の１ヶ所集中や全体的な数が不足しているという意見も出た。しかし，この意見の背景には，実数として不足していること以上に，各学習場所の設備に対する知識不足の可能性が考えられる。最も学習時間が長い場所を「大学図書館」と回答した学部学生に対する「実際の設備を教えてください」という問いの結果，23.1％（n＝156 人）が大学図書館にプリンタが「ない」と回答しており，コピー機も同様に 33.3％が「ない」と回答している。

なお，仮に実数と認識にずれがなかった場合，学内のどこに以上の設備が必要かどうかを FGI で尋ねたところ，「どこでもよい」，「図書館でなくてよい」という回答であった。

B.　学習時間帯と時間数

1.　学習時間帯の実態

次に，学習時間帯・時間数と場所の選択との



第6図　曜日別・時間帯ごとの学習時間数（日記式調査）

関連性を確認するため，日記式調査に参加した全29名分の学習時間数を計算した。具体的には，11の行動分類の内「5.　授業の予習・復習等」，「6.　卒論・修論・博論」，「7.　授業関連以外の学習」に分類された時間について，1時間刻みで全員の時間数を合計した。その結果，曜日によって多少の前後はあるが，一日の中に①9～11時，②13～15時，③21～23時の計3回，学習時間のピークが存在した（第6図）。

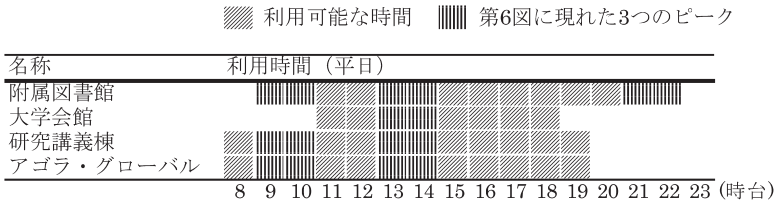
しかし，第1表に示した通り，第1ピークの時間帯は土日では図書館の閉館時間（土日は通常13:00開館）にあたっており，第3ピークの時間帯は平日・土日とも閉館時間（平日は21:45閉館，土日は通常18:45閉館）にあたっていた。図書館だけでなく，研究講義棟は平日では第3ピークの時間帯に閉鎖されており（平日は20:00以降学部学生は入棟不可），土日は終日入棟できないため，どのピークにも対応していない。また，アゴラ・グローバルも同様に平日・土日とも第3ピークの時間帯に閉鎖しており（平日は20:00まで，土日は17:30まで），大学会館においては本来の利用目的が異なることもあって，平日は第1・第3ピークに対応しておらず（平日は11:00-18:30営業），さらに土日は休業しているため，全くの対象外である（第7図，第8図）。

当然のように平日よりも土日の方が学内施設の利用時間が制限されているが，土日の学習量の多さは第1図に示されているのに加えて，FGIでも「土日も使わないと終わらない」，「土日のどちらかは必要」という回答が多数あり，週末も重要な学習時間帯であることが裏付けられている。学習を長時間継続させるための周辺要素として，食事休憩のための学食の営業や，気分転換のための学習場所移動を目的とした講義棟の開放についても言及があり，必ずしも学習場所だけが利用可能であれば学習上問題がないわけではないことも明らかになった。

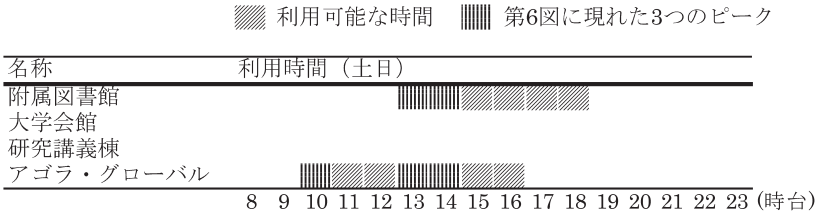
2.　学習時間数

次に，実際に生活時間全体の中で学習時間がどのように確保され，位置づけられていたのかについて述べる。日記式調査で設定した11の行動分類の内，「1.　睡眠」，「2.　食事」，「3.　移動」，「4.　授業」，「8.　アルバイト」，「9.　部活動」，「10.その他の用事」の7つの行動は日常生活において必要な行動であり，学生が学習計画を立てる際にあらかじめ定められている「生活上必要な時間」である。この内，「8.　アルバイト」，「9.　部活動」の参加・不参加の比率は，質問紙調査の結果，第9図と第10図に示すような内訳となった。調査時期が入学3ヶ月後だった関係から，学部1年生のアルバイト者は少なかったが，2年～4年は60％～70％がアルバイト者であった。部活動は逆に，学部4年生はすでに引退して参加していないため比率が下がっており，1年～2年の参加者が多数であった。

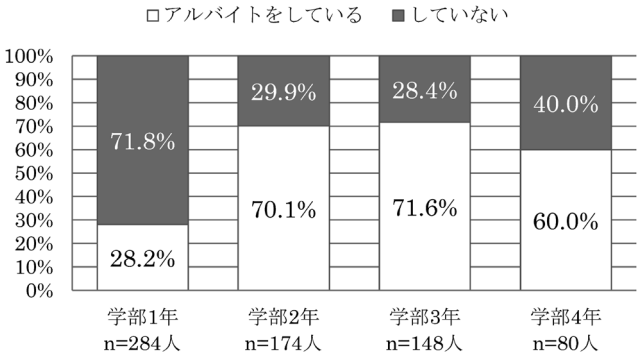
次に，日記式調査参加者全29名の生活時間を，「生活上必要な時間」と，それ以外の「5.　授業



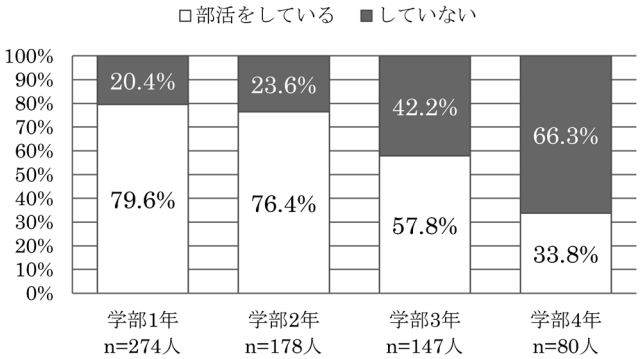
第 7 図　学内学習場所の利用時間と学習時間のピークの関係：平日



第 8 図　学内学習場所の利用時間と学習時間のピークの関係：土日



第 9 図　学年別にみたアルバイトの有無（質問紙調査）



第 10 図　学年別にみた部活動の有無（質問紙調査）

第8表　平日・土曜・日曜の平均行動時間数（日記式調査）

	平日	土曜	日曜
生活上必要な時間	16.8 (70.0)	15.3 (63.8)	15.3 (63.8)
自由に設定できる時間	7.2 (30.0)	8.7 (36.3)	8.7 (36.3)

時間（%）

の予習・復習等」,「6.　卒論・修論・博論」,「7.　授業関連以外の学習」,「11.　自由時間」の4つの行動を分類した「自由に設定できる時間」との2つに大きく分類した。2つの分類時間について，平日，土曜，日曜のそれぞれについて29名の平均時間を算出したところ，どの曜日にも大きな変化は見られず,「自由に設定できる時間」は24時間中，平均8時間前後であった（第8表）。「自由に設定できる時間」の内,「5.　授業の予習・復習等」,「6.　卒論・修論・博論」,「7.　授業関連以外の学習」を「学習時間」としてまとめ,「11.　自由時間」との内訳を第9表に示す。ここから，いずれの曜日においても行動を自由に設定できる時間の約半数を学習にあてていることが明らかになった。

次に，学年ごとの学習時間数を比較するため，日記式調査の参加者全29名の学習時間と自由時間を第10表に示した。その結果，学部1年から学部3年までは授業関連以外の学習時間がゼロ時間の学生が多く，学部4年および博士前期課程，博士後期課程になると土日を中心として授業関連以外の学習時間が増加していた。また，学習時間と自由時間を合計した自由に設定できる時間の内，学習時間が占める比率が50%を越える学生も学部1年から3年に多く，4年次に減少する。ただし，博士課程においては減少しなかった。FGIで生活時間における学習時間の配分および課題量について尋ねたところ，第II章で述べた調査対象大学のカリキュラムの設定上,「1年生は授業が多くて忙しい」,「1年生より2年生のほうが忙しい」といった回答があった。「言語はさぼったら終わりだから」や「2年生になると急に難しくなる」といったことが理由のようである。

第9表　平日・土曜・日曜の自由時間中の平均学習時間数（日記式調査）

	平日	土曜	日曜
学習時間	4.1 (56.9)	4.3 (49.4)	4.1 (47.1)
自由時間	3.1 (43.1)	4.4 (50.6)	4.6 (52.9)
合計（時間（%））	7.2 (100.0)	8.7 (100.0)	8.7 (100.0)

また，第9図と第10図に示した通り，アルバイト・部活動参加者比率を見ると，2年生は双方とも高く,「生活上必要な時間」が他学年に比べて多いという結果が出ている。

さらに，学年別に授業コマ数の分布を見てみると第11図のようになり，ここからも学部1年～2年生の多忙さが確認された。

C.　学習スタイル

1.　学習時の大学図書館利用スタイル

質問紙調査において「あなたの大学図書館の利用形態について，最も近いものを選択してください」と尋ねた結果，学習時の大学図書館の利用スタイルが明らかになった。従来からの図書館コンテンツである図書館資料の利用は41.5%（n＝821人）にとどまり，PCや持ち込み資料の利用など，図書館内である必然性がない利用スタイルが半数を超えた（第11表）。

また，図書館の利用方法については，PCの利用が，自分のノートPCも含めると65.2%（821人）と半数を超えたが（第12表），FGIで日常の学習時のPC利用について尋ねたところ,「ほぼ使わない」,「普段はいらない」,「2, 3割しか使わない」といった回答であった。これらは，FGIにおける「学習時間全体の9割が語学」,「日常は語学が多い」といった学習内容についての回答とも関連しており，PC利用は語学以外の授業において，レポートが課される試験期に集中していることが明らかになった。

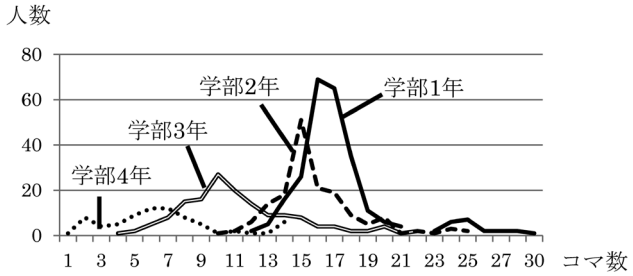
「日常的にPCを利用しない」とFGIでは回答されているにもかかわらず，大学図書館の主たる利用にPC利用を含む学生が65.2%存在するの

第 10 表　学習時間と自由時間の時間数と学習時間の比率（日記式調査）

	平日				土曜日				日曜日			
	関係[1]	以外[2]	自由[3]	比率[4]	関係	以外	自由	比率	関係	以外	自由	比率
学部1年	150	0	90	62.5	105	0	300	25.9	165	0	300	35.5
	135	0	45	75.0	480	0	75	86.5	180	0	525	25.5
	225	0	240	48.4	270	0	360	42.9	465	0	240	66.0
	315	0	75	80.8	270	0	75	78.3	285	0	255	52.8
	0	0	300	0.0	0	0	765	0.0	0	30	525	5.4
	210	45	150	63.0	60	0	195	23.5	90	30	630	16.0
	平日				土曜日				日曜日			
	関係	以外	自由	比率	関係	以外	自由	比率	関係	以外	自由	比率
学部2年	420	0	240	63.6	375	0	315	54.3	300	0	315	48.8
	15	0	150	9.1	300	0	300	50.0	105	0	135	43.8
	330	0	330	50.0	300	0	255	54.1	315	0	150	67.7
	540	0	30	94.7	675	0	60	91.8	495	0	0	100.0
	285	0	285	50.0	180	240	345	54.9	60	0	705	7.8
	平日				土曜日				日曜日			
	関係	以外	自由	比率	関係	以外	自由	比率	関係	以外	自由	比率
学部3年	480	0	330	59.3	360	0	135	72.7	510	0	240	68.0
	60	255	255	55.3	360	0	270	57.1	150	45	105	65.0
	0	0	255	0.0	30	45	570	11.6	150	0	270	35.7
	225	0	30	88.2	480	0	60	88.9	360	0	90	80.0
	平日				土曜日				日曜日			
	関係	以外	自由	比率	関係	以外	自由	比率	関係	以外	自由	比率
学部4年	60	90	60	71.4	240	60	390	43.5	105	135	120	66.7
	105	0	435	19.4	60	0	495	10.8	45	0	195	18.8
	150	0	105	58.8	0	0	330	0.0	0	0	165	0.0
	405	90	90	84.6	45	0	270	14.3	0	180	270	40.0
	180	0	105	63.2	0	0	180	0.0	180	0	105	63.2
	180	0	90	66.7	0	180	360	33.3	0	0	510	0.0
	45	270	135	70.0	0	60	0	100.0	300	210	120	81.0
	345	0	0	100.0	480	60	270	66.7	165	60	555	28.8
	45	0	225	16.7	240	0	120	66.7	210	0	315	40.0
	平日				土曜日				日曜日			
	関係	以外	自由	比率	関係	以外	自由	比率	関係	以外	自由	比率
博士課程	0	0	540	0.0	0	285	285	50.0	0	225	255	46.9
	120	90	390	35.0	60	300	240	60.0	180	270	270	62.5
	210	0	225	48.3	0	195	435	31.0	300	0	285	51.3
	720	0	30	96.0	315	0	60	84.0	360	315	165	80.4
	150	120	210	56.3	270	105	210	64.1	195	0	90	68.4
	(分)			(%)								

[1] 11 の行動分類の内，「5.　授業の予習・復習等」，「6.　卒論・修論・博論」の合計時間
[2] 11 の行動分類の内，「7.　授業関連以外の学習」の時間
[3] 11 の行動分類の内，「11.　自由時間」
[4] 1, 2, 3 の合計時間の内，1, 2 の合計時間＝学習時間の合計の比率

は，以下の理由が考えられる。65.2％の学部学生について，学習時間が最も長い場所別の内訳を第13 表に示す。PC 利用を大学図書館利用の主目的にしている学生の内，大学図書館が最も長い学習場所である学生は 22.1％（n＝494 人）しかおらず，それ以外の学生は日常では別の学習場所を主たる学習場所にしている。つまり，大学図書館以外で学習している学生は日頃 PC を学習に利用しておらず，PC 利用が必要なレポート作成時などに大学図書館を利用している可能性が高いと言える。これは「ノート PC を持っていますか。また，大学や学習場所に持ってきますか」という問



第 11 図　学年別にみた授業コマ数＝1 コマ 90 分の分布（質問紙調査）

第 11 表　大学図書館の学習時の利用スタイル（館内資料）

利用スタイル	回答数	比率
館内 PC と館内資料	236	28.7%
館内の資料のみ	57	6.9%
自分のノート PC と館内資料	48	5.8%
小計	341	41.5%
持ち込み資料のみ	148	18.0%
館内 PC と自分の持ち込み資料	120	14.6%
館内 PC のみ	81	9.9%
プリントアウト	60	7.3%
自分のノート PC と持ち込み資料	50	6.1%
利用しない	21	2.6%
小計	480	58.5%
合計（人）	821	100.0%

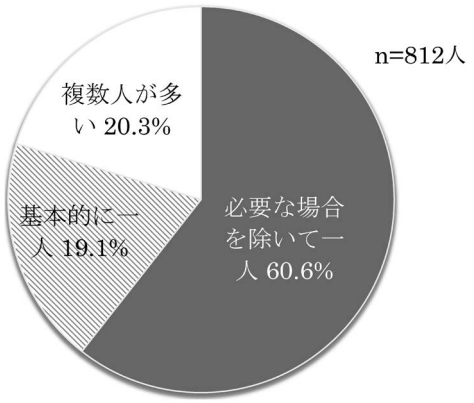
第 12 表　大学図書館の学習時の利用スタイル（PC）

利用スタイル	回答数	比率
館内 PC と館内資料	236	28.7%
館内 PC と自分の持ち込み資料	120	14.6%
館内 PC のみ	81	9.9%
自分のノート PC と館内資料	48	5.8%
自分のノート PC と持ち込み資料	50	6.1%
小計	535	65.2%
持ち込み資料のみ	148	18.0%
プリントアウト	60	7.3%
館内の資料のみ	57	6.9%
利用しない	21	2.6%
小計	286	34.8%
合計（人）	821	100.0%

いに対して，66.5%（n＝838 人）がノート PC を「持っているが，大学や学習場所には持っていかない」と回答した結果や，理由として FGI で挙がった「大学内にいるときに必要であれば大学の分で足りる」という意見とも一致する。

第 13 表　大学図書館の学習利用に PC 利用を含む学生の学習場所別の内訳

学習時間が最長の場所	回答数	比率
自宅	298	60.3%
大学図書館	109	22.1%
講義棟	50	10.1%
研究室	4	0.8%
学食	8	1.6%
アゴラ	4	0.8%
地域図書館	5	1.0%
飲食店	16	3.2%
合計（人）	494	100.0%



第 12 図　学習時の学習人数（質問紙調査）

もう一つの学習スタイルである授業時間以外の学習人数については，①「授業・ゼミで必要な場合は複数人で学習するが，それ以外は一人で学習する」60.6%（n＝812 人），②「複数人で学習す

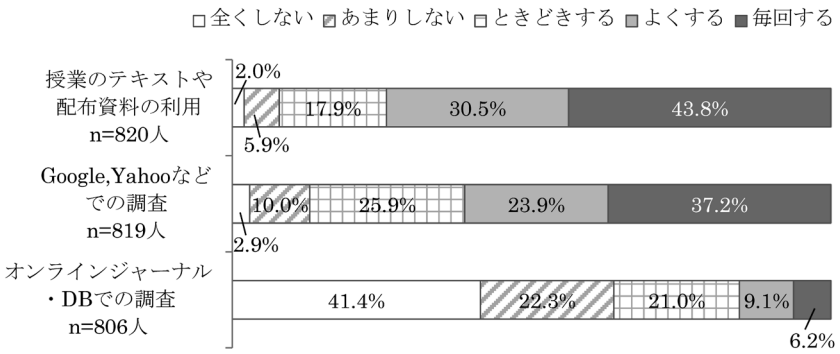
ることはない（授業・ゼミで必要な場合もない）」19.1％，③「授業・ゼミとは関係なく，複数人で学習することが多い」20.3％という回答結果であった（第12図）。

FGIで「必要な場合」の状況を尋ねたところ，各グループとも「プレゼンの前」という回答があったが，それに対する「そういう授業はほとんどない」という返答に多くの参加者が賛同した。

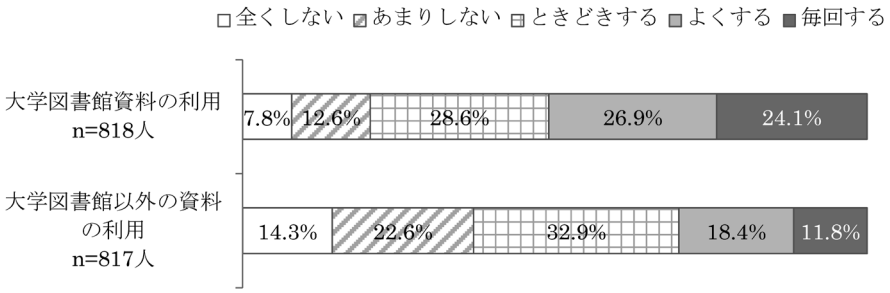
2. 学習時に参考にする情報源（モノとヒト）

学習時に参考にする情報源（モノ）について，質問紙調査で「授業での発表・レポート作成・試験のときにあなたが利用するものについてお答えください」と尋ねた結果，「授業のテキストや配布資料の利用」と「Google，Yahoo! などでの調査」は「よくする」，「毎回する」の合計がそれぞれ74.3％（n＝820人），61.1％（n＝819人）と多数を占めた（第13図）。

一方，「オンラインジャーナル・DBでの調査」は「全くしない」，「あまりしない」，「ときどきする」の選択者が84.7％（n＝806人）となり，ほとんど使用されておらず，学年別にみた場合に比率に変化はなかった。また，「大学図書館資料の利用」については「よくする」，「毎回する」を合計しても51.0％（n＝818人）と半数を少し上回る程度で，学習時に必ずしも利用されていないことが分かった（第14図）。他方で「大学図書館以外の資料の利用」は30.2％（n＝817人）が「よくする」，「毎回する」と回答しており，大学図書館の蔵書だけでは資料が十分ではない学生が一定数存在していることを示している。学習時に参考にする情報源（ヒト）についてはまず，質問紙調査で「学習時の相談相手に重視する条件の優先順位を2位まで教えてください」と尋ねた。その結果，優先順位第1位では，「回答に信頼性がある」ことよりも「気軽に聞ける」ことを重視する回答者が多かったものの，優先順位2位まで確認すると，この2点が「いつでも聞ける」ことや「回答



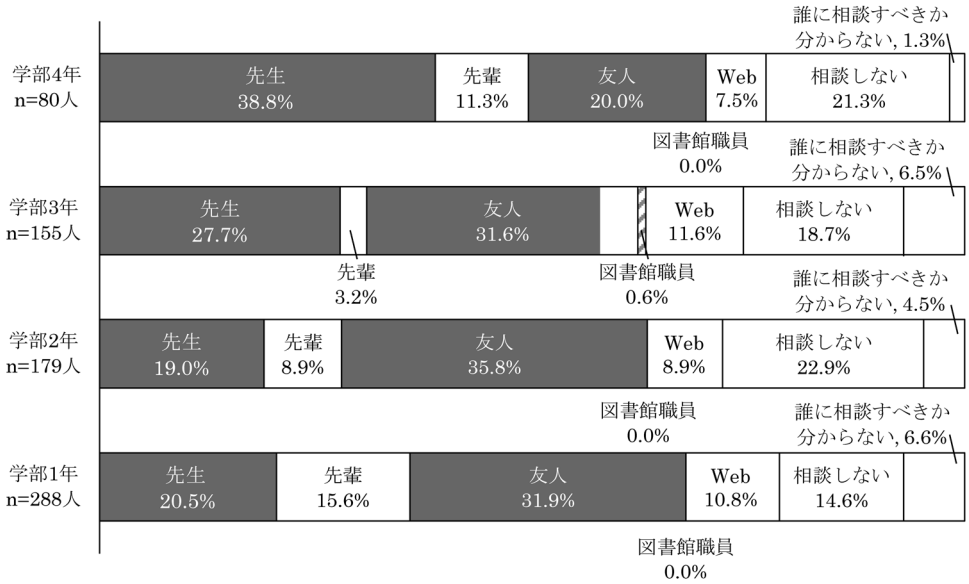
第13図　学習時に参考にする情報源（質問紙調査）



第14図　学習時に参考にする資料（質問紙調査）

第 14 表　学習時の相談相手に重視する条件（質問紙調査）

優先順位 第 1 位	優先順位第 2 位				合計（人）
	気軽に聞ける	信頼性がある	いつでも聞ける	回答が早い	
気軽に聞ける	—	303	97	44	446
信頼性がある	188	—	44	67	310
いつでも聞ける	10	16	—	9	37
回答が早い	5	18	4	—	28
合計（人）	203	337	145	120	842



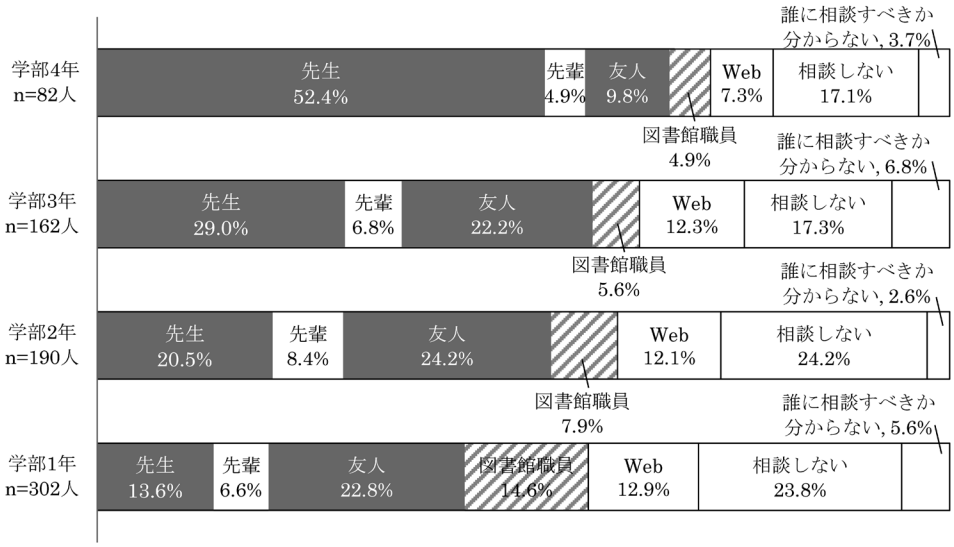
第 15 図　学年別「レポートの書き方，プレゼン／発表方法」の相談相手の選択（質問紙調査）

が早い」ことよりも多い結果となった（第 14 表）。

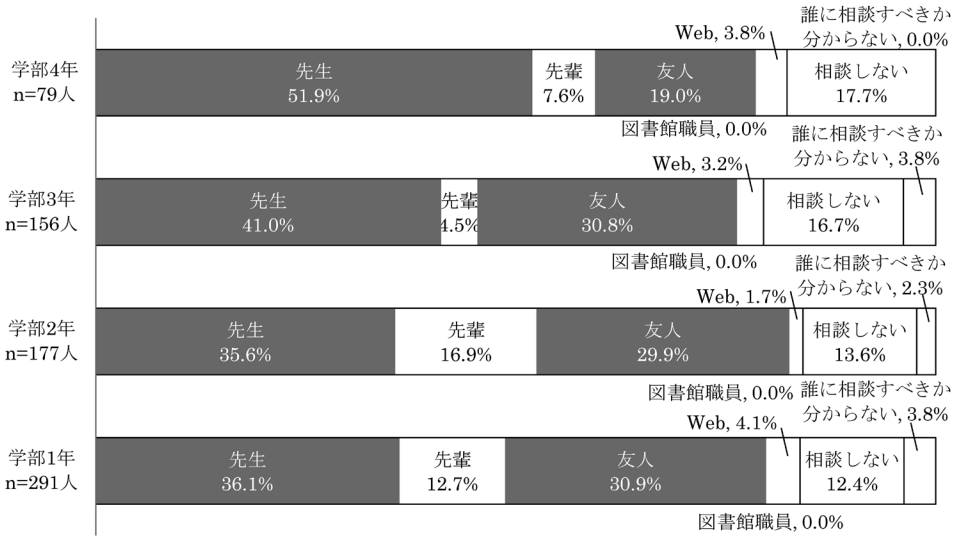
これを踏まえた上で，質問紙調査の「本・雑誌・論文の探し方」,「レポートの書き方，プレゼン / 発表方法」,「語学 / 専門分野の学習方法」における,「それぞれ相談回数が多い相手を 2 位まで教えてください」という問いの結果を確認した。第 15 図に示した通り,「レポートの書き方，プレゼン / 発表方法」の場合の結果を学年別でみると，学年が上昇するにつれて「友人」の比率が減少し,「先生」の比率が増加していることがわかる。これは「本・雑誌・論文の探し方」においても同様で，異なる点は「図書館職員」の比率が一定の大きさをもっている点である（第 16 図）。

FGI で「なぜ先輩にはあまり相談しないのか」と質問すると同時に，その他の相談相手についても，その詳細を尋ねた。その結果,「先生や友達は授業中・授業後にすぐに聞ける」といった点で「気軽さ」を感じており，授業時間外の場合には「少人数の専攻語は先生に聞きやすいが，大人数の専攻語は先生に聞きにくい」といった回答があった。先輩，友人も含め，聞く内容によって相談相手を決定している参加者が多く，このことは,「専攻語の相談は先生，それ以外は友達，これから履修する授業は先輩」という回答に最も端的に表現されている。

以上を踏まえてさらに「語学 / 専門分野の学習方法」の結果をみると,「友人」と答えた回答者が変わらず一定数いることは,「本・雑誌・論文



第 16 図　学年別「本・雑誌・論文の探し方」の相談相手の選択（質問紙調査）



第 17 図　学年別「語学 / 専門分野の学習方法」の相談相手の選択（質問紙調査）

の探し方」,「レポートの書き方，プレゼン / 発表方法」と共通していた。しかし，学部 1 年生の段階から「先生」の比率が「友人」を上回っており，専門的な内容については「気軽さ」よりも「回答の信頼性」が重視されていることが考えられる（第 17 図）。

IV.　大学生の学習における大学図書館の役割

A.　学習場所としての大学図書館の役割

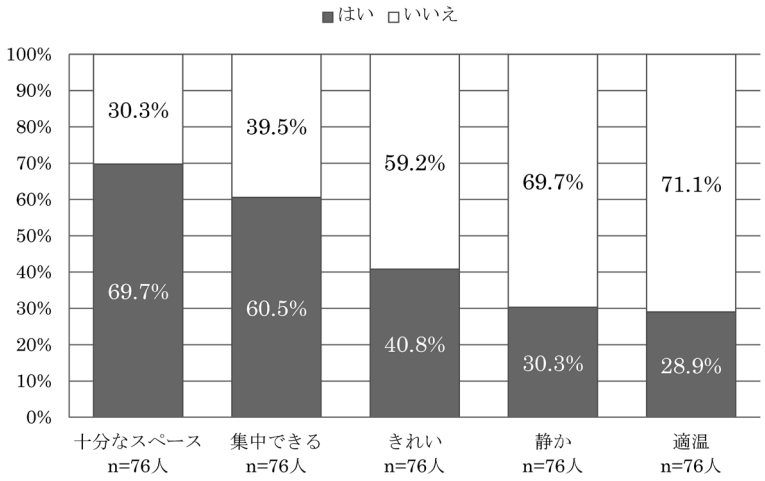
質問紙調査・日記式調査・FGI の各調査結果から，学習場所の選択との関連性が強いのは 1.　集中できる場所かどうか，2.　長時間学習を継続す

る周辺要素（食事・休憩）が整っているかどうか，3. 学習時間帯に利用可能かどうかの3要因であることがわかった。Benesse教育研究開発センターが実施した高校生版の学習調査の「あなたはふだん，家でどのくらい勉強をしますか（学習塾や予備校，家庭教師との学習は除きます）」という設問に対して，約半数にあたる42.8%が「ほとんど毎日する（週に6～7日）」または「週に半分以上はする（4～5日）」と回答しており[48]，多くの学生が高校時代から学習場所として自宅を多用していたことが分かる。ここから，本研究の質問紙調査で，最も多くの学生から自宅（62.3%）が最も学習時間が長い場所として選択されたのは自然の流れだと考えられる。しかし実際には，上記の要因2, 3が満たされている自宅学習者の内，28.2%が1については満足できる状態ではなかった。

一方，自宅以外の学習場所について，同Benesseの調査では「あなたは今，放課後や休日に，学習塾や予備校へ行っていますか」という設問があり，25.3%が「行っている」と回答しているが，大学生には資格試験や就職試験用を除けば日常的な学習用の学習塾や予備校は一般的ではない。これらに代わる学習場所として大学内の各施設，主に大学図書館（20.0%）と研究講義棟（9.9%）があてられていると考えられる。しかしこの2箇所についても，要因1が満たされている大学図書館学習者は2, 3が不十分であり，講義棟学習者は1, 2, 3ともに全く満たされていないわけではないが，十分とも言えない結果であった。

ここで重要なのは，実際には「集中できない自宅」で学習している学生に対し，大学図書館がどのような役割を果たせるのか，という点である。

大学図書館が学習だけを目的に利用されているわけではないことは，すでに多くの調査で示されている[45),49)]。このため，大学図書館に対して求めていることを学生に尋ねれば，一方で学習塾や予備校のような集中して一人で学習するスペースや友人や先輩・後輩とグループ学習するスペースという回答が予想され，他方で食べたり飲んだり話したりしながらくつろぐスペースという回答も出てくると考えられる。ゾーニングの必要性は他の調査結果からも明らかになっているが[50)]，本調査のFGIにおいて学習設備の補充箇所を尋ねた際に「どこでもよい」，「図書館でなくてよい」という回答があったように，学生は大学図書館にすべてを求めているわけではない。むしろ，「講義棟にもっと自習室がほしい」や「空き教室案内とかほしい」といった意見があり，講義棟を中心とした大学図書館以外の学内施設に対する学習場所としての期待が見られた。それにもかかわらず学内の学習場所として大学図書館が第一に選



第18図 「講義棟」で最も長時間学習する学生の講義棟内の空間に対する認識

択肢として挙げられるのは，大学図書館が従来から教育・研究の支援機関として存在してきたと同時に，その他の学内施設が学習に適した環境として整えられてこなかったことが理由として考えられる。質問紙調査において，最も長い時間「講義棟」で学習する学生の，講義棟内の空間に対する認識の結果を第18図に示した。「十分なスペースがある」については69.7%（n＝76人）が「はい」と回答しているが，「集中できる」については39.5%が「いいえ」と回答し，その背景要因となる「きれい」，「静か」，「適温」についてすべて半数以上が「いいえ」と回答している。

以上から，大学図書館は学内全体の学習場所および各場所の空間・設備の一元管理と運用を担うことが今後の役割であると提言したい。すでに繰り返し述べたように，従来の大学図書館が実施してきた利用者調査では図書館利用にのみ焦点をあてており，結果として「学生の学習時間帯が夜間なので，夜間の開館時間を延長すべき」や「様々な利用形態に応じて図書館内をエリア分けすべき」などの結論が出されてきた。

しかし，物理的に持ち出しが容易な資料を多く抱える図書館では人による管理は必然的であり，開館時間を延長することは人件費の増大に直結する。また，ゾーニングについても建物の構造上困難を抱えている場合や，ゾーニングするほどのスペースが存在しない場合には逆にそれぞれのエリアに十分な広さが確保できず，現実的とは言い難い。FGIにおいて学部学生の3グループ全てが，図書館内の座席について「個人の領域が近い」，「隣に人はいないでほしい」，「2席ずつの座席は，先に一人座っているとその隣に座りづらい」と発言したことは，一人分のスペースが十分でないことを示している。特に混雑する試験期間中については，「混むから帰る」や「人が多すぎるから嫌」という意見が複数出され，数字上の座席数と稼働数に差が生じたり，学生にストレスを与えたりしていることが明らかになった。

自宅以外の学習空間で学習することの利点は，Richard A. O'Connorが名付けた「並んだ学習」にある[51]。第III章の空間的要素に関するFGIの結果でも述べたように，下宿生を中心として自宅での「一人学習」に対する不安が述べられており，誰もいない空間での「個別学習」でも大人数で議論しながらの「集団学習」でもない，学習空間というスペースのみを共有する第3の学習スタイル「並んだ学習」が存在している。このスタイルについては，“他の人も勉強しているのを見ると励みになる”という回答がその理由を最も端的に表現しており[50]，FGIでも「環境的には勉強している人たちが周りにいる方がいい」という意見にそれが表れている。学習時間の大半が大学の授業に関連する学習に費やされている以上，このような空間を用意することは大学や大学図書館の責務と言える。

有効活用されていない可能性がある既存の設備を適切に配置し，それらについて十分に広報を行い，無人管理が可能な資料・機器類が存在しないスペースを開放すること，さらに全ての「学習場所」についての総合窓口となることの方が，学習実態においても経費面においても大学図書館として実際的な選択である。利用時間の延長もゾーニングも「館内」から「学内」へ拡大して計画・実行すべきではないだろうか。

B.　情報源としての大学図書館の役割

1.　モノ（資料）の役割

学術情報の電子化によって図書館そのものに存続危機が生じていることは第I章で述べたとおりである。しかし，これは図書館を図書・雑誌を中心とした資料保存庫として定義した場合の存続危機である。大学設置基準の第38条にあるように，“大学は，学部の種類，規模等に応じ”，“教育研究上必要な資料を，図書館を中心に系統的に備え”，図書館は“資料の収集，整理及び提供を行う”ことが求められてきた[52]。この「教育研究上必要な資料」が紙媒体でのみ存在していた歴史は確かに長かったが，本来の図書館の役割は教育研究上必要な「情報」の収集・整理・提供であり，その媒体は問わないはずである。

本研究の調査結果では，第11表に示した通り，質問紙調査においては，学習時の大学図書館の利

用は41.5%が「館内資料」の利用を含むスタイルであった。第14図に示した「大学図書館資料の学習時の利用頻度」についても，51.0%が「毎回利用する」,「よく利用する」と回答している。PC利用や電子ジャーナル，データベースとは選択肢を分けていることから，これらは純粋に紙媒体の図書・雑誌の利用について回答しており，依然として紙媒体の利用者が一定数存在していることが明らかになった。しかしこれらはそのまま資料保存庫としての図書館の意義を保証しているものではない。なぜなら，FGIで「図書館にしかない辞書を使って勉強することがある」という意見に示されているように，積極的な理由ではなく，制限されることで生じた消極的な理由による利用が考えられるからである。また,「オンラインジャーナル・DBでの調査」に対しては「毎回する」,「よくする」が8.3%しか存在しなかったが,「Google，Yahoo! などでの調査」については61.1%おり，電子媒体よりも紙媒体を好んで利用しているとは言い難い。

「授業のテキストや配布資料の学習時の利用頻度」については，第13図に示した通り，74.3%が「よく利用する」,「毎回利用する」と回答しているが，FGIでは「(辞書などの教材を）学校に置いておいて，（重たいので）持ち運ばない」といったように，紙媒体で教材が存在している結果，学習場所や時間帯が制限されている現状も指摘された。このような制限の解消のための代表的な取り組み事例が，千葉大学アカデミック・リンク・センターの「「デジタルコースパック」プロジェクト」であり，これは“自作教材，著作物の一部など，これまで教室での配布にとどまっていた授業資料の電子的パッケージ化を実現し，提供環境を整備”することを目的としている[53]。

以上から，大学図書館の情報源（モノ）における役割は，従来の「適切な収集・整備・提供・保存」に加えて,「制作」を加えるべきではないだろうか。電子ジャーナルの誕生とその後の勢いや電子ブックの台頭に多くの大学図書館が困惑し，対応に追われている。しかしそうした目先のことにとらわれ過ぎれば，これまで築いてきた「収集・整備・提供・保存」の役割すら危うくなることは間違いない。これらの役割を変わらず丁寧に果たしていくことを大前提として，教材そのものを生みだすのは当然教員の役割だが，今後はそれらのあるべき流通方法を考慮した上で電子版を「制作」し，整備・提供する役割も必要になる。その際に，教材を必ずしもプリント類だけに限定せず，教員が執筆した教科書や学術書の電子出版にまで広げれば，授業教材全般の一元管理が可能になる。

2. ヒト（図書館職員）の役割

大学図書館としての学習支援の中で現在最も注目を浴びているのが「ラーニング・コモンズ」であり，その中で実施される「人的支援」であることは，文部科学省がまとめた『大学図書館における先進的な取り組みの実践例』の「学習支援」の項目からも明らかである[54]。

直接的な人的支援として図書館職員が実施してきた内容には，大きく，1. 情報リテラシー教育への参加と2. レファレンスサービスの2点があげられる。この内，1は授業の一環として学生側の要求の有無にかかわらず実施されてきたが，2については図書館職員以外の学習時の相談対象とその状況が不明確であった。本研究の質問紙調査の結果では「相談回数が多い相手（第1位)」について,「本・雑誌・論文の探し方」,「レポートの書き方，プレゼン / 発表方法」,「語学 / 専門分野の学習方法」の全3場面において，図書館職員はいずれも10%に満たない回答数であった。さらに,「相談回数が多い相手（第2位)」についても集計したところ，図書館職員については各場面とも第1位と大差がない結果となった。

学生にとって図書館職員とは情報収集における検索場面では一定の支援を求める対象となっているが，この部分ですら先生・先輩はもちろんのこと，友人やWebよりも比率は低い。さらに発表や専門分野の学習段階になれば，全く相談対象とはならないことが明らかになった。

以上の結果から，大学図書館の情報源（ヒト）における役割について，次の2点を提言したい。

1点目は「検索支援」に関わる部分である。図書館職員にとって最も高かった，この場面における比率をより高くするためには2つの方法が考えられる。

1つ目の方法は，鎌田均が紹介したエンベディッド・ライブラリアンのように，“より利用者に近づいた環境でサービスを提供する”ことである[55]。エンベディッド・ライブラリアンとは，“図書館司書が，利用者の環境に自分を「埋め込み」，利用者と作業等で協働し，混じり合うことによって，利用者の行動，またそれによる利用者の情報，情報サービスに対するニーズをより直接的に知り，より迅速なサービスをその場で提供できることにある”[54]。第14表に示した通り「学習時の相談相手に重視する条件」の第1位は「気軽に聞ける」ことであった。つまり，図書館職員自らが学習の現場に存在することで，気軽さを感じてもらうことがエンベディッド・サービスの目的の一つである。

2つ目の方法は提言の2点目とも関連するが，学生との協働を目指すことである。すべての学習の場に図書館職員を「埋め込む」ことは現実的ではないため，1つ目の方法は必然的に限定的にならざるを得ない。このため第16図で示した「検索」場面の第1位について27.7％を占める「先輩」と「友人」を学習支援に組み込むことが考えられる。これは，図書館が図書館の経費で雇用した学生を，図書館内に配置して協働することではなく，授業やゼミにおいて「すでに埋め込まれている」ティーチング・アシスタントやリサーチ・アシスタントとして働いている学生に対して図書館職員が知識と技術を伝達することである。

提言の2点目は「発表支援」と「専門分野への支援」において，前述した文部科学省のまとめにも掲載されている，お茶の水女子大学や立教大学のような「人的支援」を実施すべきである，ということである。2010年にまとめられた『大学図書館の整備について（審議のまとめ）』において，“教育や研究と密接に関わる業務を行う者は，従来の事務職員とは区別して位置付けを検討していく必要がある”と述べられている[56]。しかし現時点で能力的にも制度的にも実現していない以上，第15図に示した通り，2つの場面において支援対象の学生に支援可能なのは図書館職員ではなく，彼らの先輩・友人である。このことから，図書館が支援すべきは彼らを組織し，運営することではないだろうか。

謝　辞

本論文は，三田図書館・情報学会の研究助成（2011年度）を受けて慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程図書館・情報学専攻情報資源管理分野に提出した修士論文を元にしている。執筆にあたってご指導いただいた慶應義塾大学文学部上田修一教授，調査にご協力いただいた東京外国語大学の各位に感謝申し上げます。

注・引用文献

1）山内乾史．“大学授業とは何か―改善の系譜―”．大学授業研究の構想：過去から未来へ．京都大学高等教育教授システム開発センター編．東信堂，2002, p. 5–54.
2）梶田叡一．新しい大学教育を創る―全入時代の大学とは．有斐閣，2000, 204p.
3）杉谷祐美子．“能動的な学びをめざして”．大学の学び：教育内容と方法．杉谷祐美子編．玉川大学出版部，2011, p. 292–300.
4）苅谷剛彦．授業の質・学習の質．IDE．1996，no. 380, p. 28–33.
5）溝上慎一．“近年の大学教育改革における学び支援プロジェクトの位置づけ”．大学生の学びを支援する大学教育．溝上慎一編．東信堂，2004，p. 20–33.
6）“学士課程教育の構築に向けて（答申）”．中央教育審議会．http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf,（参照　2013-12-8）.
7）川嶋太津夫．学士課程教育の構築に向けて：その論点と課題．大学教育学会誌．2008，vol. 30，no. 1, p. 25–28.
8）川嶋太津夫．ラーニング・アウトカムズを重視した大学教育改革の国際的動向と我が国への示唆．名古屋高等教育研究．2008, vol. 8, p. 173–191.
9）山田礼子．“アメリカの高等教育機関におけるIR部門の役割と事例”．大学教育を科学する：学生の教育評価の国際比較．東信堂，2009, p. 115–124.
10）沖清豪．大学の教育機能の改善に資するInstitutional Researchに関する基礎的研究：中間報告書．

早稲田大学教育総合研究所，2008, 30p.
11）杉谷祐美子．“大学内における教育効果の学生間比較”．転換期の高等教育における学生の教育評価の開発に関する国際比較研究．山田礼子研究代表．同志社大学，2007, p. 49–72.
12）青山佳代．アメリカ州立大学におけるインスティテューショナル・リサーチの機能に関する考察．名古屋高等教育研究．2006, no. 6, p. 113–130.
13）大学評価と IR．IDE. 2011, no. 528, p. 4–56.
14）特集 IR のいま．大学評価研究．2011，no. 10，p. 9–66.
15）Saupe, J. L. The Functions of Institutional Research. 2nd ed., Association for Institutional Research, 1990, 17p.
16）山田礼子．学生調査と IR：教育の質の保証にむけてのデータの活用．IDE．2011，no. 528，p. 30–35.
17）山田礼子．大規模継続学生調査の可能性と課題．大学論集．2011, no. 42, p. 245–263.
18）山田礼子．学生の情緒的側面の充実と教育成果：CSS と JCSS 結果分析から．大学論集．2009，no. 40, p. 181–198.
19）木村拓也，西郡大，山田礼子．高大接続情報を踏まえた「大学教育効果」の測定：潜在クラス分析を用いた追跡調査モデルの提案．高等教育研究．2009, no. 12, p. 189–214.
20）東京大学大学経営・政策研究センター．全国大学生調査．http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/cat77/cat82/,（参照　2013-12-8）.
21）Benesse 教育研究開発センター．大学生の学習・生活実態調査．http://benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/hon/index.html,（参照　2013-12-8）.
22）山田礼子．“アセスメントの理論と実践”．転換期の高等教育における学生の教育評価の開発に関する国際比較研究．山田礼子研究代表．同志社大学，2007, p. 7–20.
23）東京大学学生生活委員会学生生活調査室．東京大学学生生活実態調査．http://www.u-tokyo.ac.jp/stu05/h05_j.html,（参照　2013-12-8）.
24）慶應義塾大学学生総合センター編．2008 年度慶應義塾大学学生生活実態調査報告（第 24 回）．慶應義塾大学学生総合センター．2009, 119p.
25）松井博．大学の自己点検評価と大学図書館のサービス改善．図書館雑誌．1997，vol. 91，no. 3，p. 164–166.
26）“大学図書館における評価指標報告書”．国立大学図書館協会法人格取得問題に関する附属図書館懇談会・図書館評価指標 WG．http://wwwsoc.nii.ac.jp/anul/j/publications/reports/73.pdf,（参照　2013-12-8）.
27）永田治樹，藤井美咲，北村明久．SERVQUAL による図書館サービスの品質評価．大学図書館研究．2000, no. 59, p. 1–15.
28）佐藤義則，永田治樹．図書館サービスの品質測定について：SERVQUAL の問題を中心に．日本図書館情報学会誌．2003, vol. 49, no. 1, p. 1–14
29）佐藤義則．動向レビュー LibQUAL＋の展開と図書館サービスの品質評価．カレントアウェアネス．2004, no. 280, p. 9–12.
30）LibQUAL．http://www.libqual.org/home,（参照 2013-12-8）.
31）金沢大学附属図書館アンケート調査．http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/LQ/,（参照　2013-12-8）.
32）浅尾千夏子，杉野珠梨亜，藤本優子．慶應義塾大学における LibQUAL＋．Medianet. 2009, no. 16, p. 7–11.
33）上岡真紀子．学習のための新エリアの企画：FGI と LibQUAL＋の調査結果を活用して．Medianet. 2009, no. 16, p. 28–31.
34）“Task force on academic library outcomes assessment report”. Association of College and Research Libraries. http://www.ala.org/acrl/publications/whitepapers/taskforceacademic,（参照　2013-12-8）.
35）戸田あきら，永田治樹．学生の図書館利用と学習成果：大学図書館におけるアウトカム評価に関する研究．日本図書館情報学会誌．2007，vol. 53，no. 1, p. 17–34.
36）野田文香．アウトカム評価としてのインスティテューショナル・リサーチ機能．立命館高等教育研究．2009, no. 9, p. 125–140.
37）谷村英洋．大学生の学習時間分析：授業と学習時間の関連性．大学教育学会誌．2009，vol. 31，no. 1, p. 128–135.
38）三浦逸雄．“大学図書館の利用者調査”．図書館利用者調査の方法と問題点．日本図書館学会研究委員会編．日外アソシエーツ，1986, p. 84–100.
39）中村和彦．大学図書館の利用に影響する要因は何か？：利用者特性と状況が図書館利用や情報探索行動に及ぼす影響．南山大学図書館紀要．2002, no. 8, p. 6–25.
40）両角亜希子．大学生の学習行動の大学間比較：授業の効果に着目して．東京大学大学院教育学研究科紀要．2010, no. 49, p. 191–206.
41）長谷川哲也，内田良．高等教育機関における図書館評価：「大学図書館の社会学」を構想する．愛知教育大学教育創造開発機構紀要．2011, no. 1, p. 1–9.
42）Johnson, Diane Tobin. Focus on the library customer: revelation, revolution, or redundancy?: Marketing of Library and Information Services. Library Trends. 1995, vol. 43, no. 3, p. 318–325.

43）“学生利用者アンケート結果”．東京外国語大学附属図書館．http://www.tufs.ac.jp/library/gaiyo/kitei/enquete_H22ND.pdf,（参照　2013-12-8）.
44）佐藤義則．図書館サービスにおける利用者調査の意義と方法．情報の科学と技術．2008, vol. 58, no. 6, p. 272–277.
45）立石亜紀子．大学図書館における「場所としての図書館」の利用実態．Library and Information Science. 2012, no. 67, p. 39–61.
46）“2010 年国民生活時間調査報告書”．放送文化研究所．http://www.nhk.or.jp/bunken/summary/yoron/lifetime/pdf/110223.pdf,（参照　2013-12-8）.
47）“平成 18 年社会生活基本調査”．総務省統計局．http://www.stat.go.jp/data/shakai/2006/pdf/choa.pdf,（参照　2013-12-8）.
48）Benesse 教育研究開発センター．第 4 回学習基本調査報告書（高校生版）．http://benesse.jp/berd/center/open/report/gakukihon4/hon/index_kou.html,（参照　2013-12-8）.
49）関東学院大学図書館．「図書館利用者アンケート」調査報告．Library talk：関東学院大学図書館報．2011, no. 35, p. 2–6.
50）上岡真紀子．慶應義塾大学における利用者調査の事例．情報の科学と技術．2008, vol. 58, no. 6, p. 278–284.
51）O'Connor, Richard A. “Seeing duPont within Sewanee and Student Life”. Final report for the Jesse Ball duPont library. The library planning task force, 2005, p. 57–76.
52）昭和 31 年 10 月 22 日文部省令第 28 号：1956，大学設置基準.
53）千葉大学アカデミック・リンク・センター．http://alc.chiba-u.jp/project.html,（参照　2013-12-8）.
54）文部科学省研究振興局情報課．“学習支援”．大学図書館における先進的な取り組みの実践例―大学の学習・教育・研究活動の質的充実と向上のために―．文部科学省研究振興局情報課，2011，p. 1–9.
55）鎌田均．動向レビュー：「エンベディッド・ライブラリアン」：図書館サービスモデルの米国における動向．カレントアウェアネス．2011, no. 309, p. 6–9.
56）文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会．大学図書館の整備について（審議のまとめ）―変革する大学にあって求められる大学図書館像―．文部省研究振興局情報課学術基盤整備室，2010, 73p.

要　　旨

【目的】本研究は，大学生の学習場所・時間・形態に関する実態調査を行っている。調査結果に基づいて，大学図書館においてより学習実態に即したサービス展開を可能にする方向性を提案することと，その中での大学図書館の役割について考察することを目指した。

【方法】東京外国語大学の全学生を対象に，学生が学習場所の選択時に優先する空間・設備の各要素と学習形態・学習時間数を質問紙調査により調べた。さらに，学生 29 名を対象に 3 日間の生活時間調査を実施し，同学生に対するフォーカスグループインタビューで学習に関わるより詳細なデータを収集した。

【結果】回答した全学部学生のうち 1）62.3％が最も利用時間が多い学習場所が「自宅」であり，2）42.3％が空間要素として「集中できる」ことを最も重視していたが，「自宅」では「集中できない」と回答した学生が 28.2％いた。一方，「大学図書館」では「集中できる」という回答者が 94.6％いたが，学内学習の阻害要因としては，学食の営業時間の短さや休憩スペースの不足など，学習を継続させるための周辺要素が十分でないことが挙げられる。また，持ち込み資料のみを使用した学習スタイルの学生が一定数いるため，館外へ学習場所を分散させることで，各学習場所のスペース確保だけでなく，新たな空間の創出にもつなげられることが明らかになった。

付録１　東京外国語大学学生の学習環境・学習時間を調査するアンケート

A.　最初に下記の項目にお答えください

学年をお答えください。　※１つだけ○

1: 学部１年　2: 学部２年　3: 学部３年　4: 学部４年
5: 修士１年　6: 修士２年　7: 博士１年　8: 博士２年　9: 博士３年　10: その他

★学部生の方　専攻語をお答えください。　※１つだけ○

1: 英語　2: ドイツ語　3: フランス語　4: イタリア語
5: スペイン語　6: ポルトガル語　7: ロシア語　8: ポーランド語　9: チェコ語
10: 中国語　11: 朝鮮語　12: モンゴル語　13: インドネシア語
14: マレーシア語　15: フィリピン語　16: タイ語　17: ラオス語　18: ベトナム語
19: カンボジア語　20: ビルマ語　21: ウルドゥー語　22: ヒンディー語
23: アラビア語　24: ペルシア語　25: トルコ語　26: 日本語　27: その他

B.　学習場所についてお答えください

あなたの学習場所について，**利用時間が長い順**にお答えください。※（　）内に数字を記入

図＝図書館，講義棟＝講義棟内の空きスペース／教室内
※利用する場所のみ順位をつけてください（残りは空欄）
1: 自宅　2: 大学図　3: 院生室　1 位（　）　2 位（　）　3 位（　）
4: 講義棟　5: 研究室　6: 学食　4 位（　）　5 位（　）　6 位（　）
7: アゴラ　8: 地域図　9: 飲食店　7 位（　）　8 位（　）　9 位（　）

あなたが学習時に重視する空間の**優先順位**を**２位まで**教えてください。※（　）内に数字を記入

1: 地理的に場所が便利　2: 十分なスペース　優先順位１位（　）
3: 集中できる　4: きれい　5: 静か　優先順位２位（　）
6: 適温　7: 飲食可　8: 会話可

質問３で回答した１位と２位の場所の，**実際の**環境を教えてください。　※ 該当する箇所に✓

利用頻度が【**1 位**】の場所

1. 地理的に場所が便利	2. 十分なスペース	3. 集中できる	4. きれい	5. 静か	6. 適温	7. 飲食可	8. 会話可

利用頻度が【**2 位**】の場所

1. 地理的に場所が便利	2. 十分なスペース	3. 集中できる	4. きれい	5. 静か	6. 適温	7. 飲食可	8. 会話可

C.　学習時に利用するものについてお答えください

あなたが学習時に利用する設備の**利用頻度**を**３位まで**教えてください。※（　）内に数字を記入

1: PC　2: プリンタ　3: コピー機　4: スキャナ　利用頻度１位（　）
5: イヤホン/ヘッドホン　6: DVD プレーヤー　利用頻度２位（　）
利用頻度３位（　）

質問３で回答した１位と２位の場所の，**実際の**設備を教えてください。　※ あるものに✓

利用頻度が【**1 位**】の場所

1. PC	2. プリンタ	3. コピー機	4. スキャナ	5. イヤホン／ヘッドホン	6. DVD プレーヤー	7. 該当なし

利用頻度が【**2 位**】の場所

1. PC	2. プリンタ	3. コピー機	4. スキャナ	5. イヤホン／ヘッドホン	6. DVD プレーヤー	7. 該当なし

ノート PC を持っていますか。また，大学や学習場所に持ってきますか。　※１つだけ○

1: 持っていない
2: 持っているが，大学や学習場所には持っていかない
3: 持っており，大学や学習場所に持っていく

あなたの**大学図書館の**利用形態について，最も近いものを選択してください。

1: 館内 PC のみ利用することが多い
2: 館内 PC と自分の持ち込み資料を利用することが多い
3: 館内 PC と館内資料（図書・雑誌・新聞等）を利用することが多い
4: 館内の資料のみ（コピー機の利用も含む）利用することが多い
5: 席の利用（自分のノート PC と館内資料）が多い
6: 席の利用（自分のノート PC と持ち込み資料）が多い
7: 席の利用（持ち込み資料のみ）が多い
8: プリントアウトのために利用することが多い
9: 大学図書館は利用しない

D.　学習時に参考にするものについてお答えください

学習時の相談相手に重視する条件の**優先順位**を**２位まで**教えてください。※（　）内に数字を記入

1: 気軽に聞ける　2: 回答に信頼性がある　優先順位１位（　）
3: いつでも聞ける　4: 回答が早い　優先順位２位（　）

a～c について，**相談回数が多い相手**を**２位まで**教えてください。※（　）内に数字を記入

※６か７を選択する場合は１位欄のみ記入して下さい。
1: 先生　2: 先輩　3: 友人　a: 本・雑誌・論文の探し方　１位（　）　２位（　）
4: 図書館職員　5: Web　b: レポートの書き方
6: 相談しない　プレゼン・発表方法　１位（　）　２位（　）
7: 誰に相談すべきか分からない　c: 語学／専門分野の学習方法　１位（　）　２位（　）
＊Web＝mixi, twitter, Yahoo 知恵袋等

授業での発表・レポート作成・試験のときにあなたが利用するものについてお答えください。

	全くしない		ときどきする		毎回する
1: Google,Yahoo などでの調査	1	2	3	4	5
2: オンラインジャーナル・DB での調査	1	2	3	4	5
3: 大学図書館資料の利用	1	2	3	4	5
4: 大学図書館以外の資料の利用	1	2	3	4	5
5: 授業のテキストや配布資料の利用	1	2	3	4	5

授業以外の時間に複数人で学習しますか。　※１つだけ○

1: 授業・ゼミで必要な場合は複数人で学習するが，それ以外は一人で学習する
2: 授業・ゼミとは関係なく，複数人で学習することが多い
3: 複数人で学習することはない（授業・ゼミで必要な場合もない）

E.　生活・学習時間についてお答えください

あなたの１週間の生活時間について，**学内と学外に分けて**お答えください。

1　前期の授業コマ数	合計____コマ	
学内	**(A) 月～金**	**(B) 土日**
2　授業関連（含む卒論・修論・博論）の学習時間	合計____時間	合計____時間
3　授業関連以外の学習時間	合計____時間	合計____時間
学外（自宅含む）	**(A) 月～金**	**(B) 土日**
4　授業関連（含む卒論・修論・博論）の学習時間	合計____時間	合計____時間
5　授業関連以外の学習時間	合計____時間	合計____時間
アルバイト・サークル（学内外合計）	**1 週間合計**	
6　アルバイトをしている時間	合計____時間	
7　サークル・部活動の時間	合計____時間	
起床・就寝	**(A) 月～金**	**(B) 土日**
8　起床時刻	平均____時頃	平均____時頃
9　就寝時刻	平均____時頃	平均____時頃

付録２　FGI 調査のインタビューガイド

インタビューガイド

はじめに
　このインタビューは，座談会のようなものです。気軽に発言してください。
　お尋ねしたことに正解はありません。ご自身が思ったこと，感じたことを自由にお話しください。

テーマ：いつ，どこで，誰と，何を使って，勉強していますか？
①学習空間・学習場所について
A.「集中できる」が空間要素の最重要ポイントでしたが，どのような条件が揃うと集中できますか？　逆に，どのような場合，集中できませんか？
　参考：その他の空間要素「十分なスペース」「きれい」「静か」「適温」「飲食可」「会話可」
B.「自宅」が 56％で第１位でした。設備面では「大学図書館」が最も充実しているように思われますが，なぜでしょうか。
②学習設備について
A.　設備の優先順位１位は「PC」の次が「イヤホン／ヘッドホン」でした。これはなぜだとお考えですか？
B.　全体の 90％がノート PC をお持ちのようですが，その内の 70％が学習場所に持っていかないそうです。なぜでしょうか。
③相談相手について
　相談する相手は「先生」が１位，「友達」が２位でした。先輩には相談しないのでしょうか？
④学習は１人？複数？
　「授業・ゼミで必要な場合は複数人で学習するが，それ以外は１人で学習する」が 65％と過半数を占めましたが，「必要な場合」はどれくらいありますか？
⑤学習時間について
　勉強する時間と学習場所の選択には関連性がありますか？